田んぼわらしの ささやき

田んぼ10年だより

第 21 号　2021 年 3 月 31 日発行

田んぼの生物多様性向上10年（略称：田んぼ 10 年）ニュースレター

発行：NPO 法人ラムサール・ネットワーク日本（ラムネット J）　水田部会
所在地：〒110-0016 東京都台東区台東 1-12-11 青木ビル 3F
TEL/FAX：03-3834-6566　電子メール：info@ramnet-j.org
ホームページ：http://www.ramnet-j.org

目 次

NBSAP フォーラム分科会「2030 年『生きもの賑う』農業が主流化！」報告　COND　中島稜太 ..... 1～2
甦れ！ふゆみずたんぼ　いきもたんぼプロジェクト世話人 小野寺雅之 ..... 2～3
田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト参加者数が 300 件を超えました 3
水田部会からのお知らせ・編集後記 4

✷ ✷ ✷ ✷ ✷

NBSAP フォーラム分科会「2030 年『生きもの賑う』農業が主流化！」報告　COND　中島稜太

国際自然保護連合日本委員会では、生物多様性国家戦略への注目喚起・次期生物多様性国家戦略に向けた最新情報を共有・過去の国家戦略の課題の克服のための議論を目的として「生物多様性国家戦略について考えるフォーラム～自然共生社会の設計図作りに参加しよう！～」と題したオンラインイベントを 3 月 11 日から 4 月 6 日までの間で全 7 回のシリーズで開催し、共催団体であるラムネット J は『2030 年「生きもの賑わう農業」が主流化！』と題して 3 つ目の分科会として開き 100 名近い方が参加をしました。

ラムネット J の分科会は、数多くの有識者からの話題提供とパネルディスカッションにより構成されたものとなっており、2021 年 3 月 22 日(月)の 17 時から 19 時 30 分に開催をしました。

話題提供では、ラムネット J(呉地正行)から生物多様性を活かした農業「田んぼの生物多様性向上とは」、農林水産省(環境政策室)から環境と経済がともに循環し向上「新農林水産省生物多様性戦略のポイント」、NPO 法人オリザネット(斎藤光明)から生きものと農業の問題と解決策「農水省の制度で生物多様性の向上を図るには」、全農グループ SR 事務局(山崎敏彦)から田んぼの生きものから学ぶ「さあ、はじめよう！田んぼの生きもの調査」、NPO 法人田んぼ(舩橋玲二)から生きもの調査と水田環境「生きものは語る」、コープデリ生活協同組合連合会副理事長(永井伸二郎)から農村文化とトキの 10 年の取り組み「佐渡トキ応援お米プロジェクト」、河北潟湖沼研究所(高橋久)から生物多様性を育む農業を支援するための仕組みづくり「河北潟からの挑戦」と計 7 名の方からの事例の紹介を頂きました。

自然共生社会において自身が最も課題と考えているのが農林水産業であり食料問題としているので、田んぼという環境に対する有識者からの多様な事例を聞くことができたのは貴重な時間となりました。

パネルディスカッションでは、テーマ「農業の生物多様性を向上させるために」に対して「農水省の制度を使って」・「生きもの調査」・「生産現場と消費者をつなぐ」の 3 つの課題のポイントの説明があり、また話題提供に対する質疑応答やアンケートがありました。

アンケートでは、農水省の制度に関して「農業地域の生物多様性が劣化していることについて、そのように思いますか」「生物多様性戦略に数値目標が必要だと思いますか」、生きもの調査に関して「田んぼの生きもの調査をやってみたことはありますか」「田んぼの生きもの調査が生産地の環境改善に役立つと思いますか」、生産現場と消費者に関して「有機米や生きものと共生する田んぼで収穫した米は慣行栽培よりも農協や流通業者が良い値で買い取ることに対して」「有機米や生きものに配慮した米は値段が高く若いファミリー層が多いスーパーでは扱われないことについて」「有機米や生きものに配慮した米を購入し続けることで、有機農家等の支援や拡大に繋がっていると思います

か」という問いを参加者に行い、回答結果に対して、その場で登壇者からのご意見を頂きました。
最後に農業と生物多様性について登壇者から一言ずつコメントがあり、人間は生物多様性の一員である事を自覚し、2050年の自然共生社会を目指して何をすべきか。地域に目を向け、生物多様性と共に農家も守り、生きものと生産者と消費者がより良い関係を築くことが大切といった意見がありました。農林水産省の方からは分科会において出された様々な意見だけでなく、今後も機会を設けていき、出された意見を国家戦略へ反映させていきたいといったコメントを頂きました。
今回の分科会後の４月６日(火)のフォーラム最終回である全体会では、全 5 団体が分科会での成果を共有し、自然共生社会に向けた戦略について議論を予定しています。ラムネット J では分科会の成果として、農業の生物多様性向上に関心のある参加者との議論の結果を提案として報告をまとめます。
フォーラム終了後には、「次期生物多様性国家戦略に期待する、５つの戦略（仮）」といった提言書を共催団体と国際自然保護連合日本委員会の名義で環境省に提出を予定しています。
以上、大まかではありますが全体的な報告となります。
最後に、私が所属する Change Our Next Decade (COND)は、生物多様性分野の活動をしているユース(若者)団体で、本フォーラムシリーズにおいてラムネット J さんと同じく分科会を開催いたしました。そのご縁で今回、報告原稿を執筆させて頂きました。
田んぼ(農業)と生物多様性の課題に対し、一食米 3 合食べる中島としては、深刻な問題であり、自然共生社会を目指すために、田んぼ 10 年プロジェクト参加者としても、より一層、取り組んで参ります。

甦れ！ふゆみずたんぼ

いきもたんぼプロジェクト世話人 小野寺雅之

三陸沿岸に壊滅的な被害をもたらした 3.11 の大震災から１０年が経ちます。三陸沿岸は津波によってその歴史を刻んできました。ほぼ４０年に１度は大津波が襲来し、一生の間に１回か２回、多ければ３回は大津波に遭遇しています。はるか縄文の時代から、三陸の住民は繰り返し津波に襲われていますから、その体験は遺伝子にまで組み込まれているのです。

四季が巡ってくるように、津波もやってきます。その時に、運悪く逃げ損なえば命を失う。これが冷厳な事実であり、それ以上でも以下でもない。ですから、私たちに「なぜ自分たちはこんな目に遭うのか」という問いは存在しません。取材に訪れた報道関係者が、被災者の顔が明るいことに意外な印象を受けていたようですが、その明るい顔には歴史の裏付けがあるのです。

2011 年 4 月 29 日　復興前の被災した田んぼ

自然はこのように凶暴な姿を見せることもあります。しかし、穏やかな姿で、多くの恵みを私たちにもたらしてくれるのも、また自然なのです。私が暮らす大谷（気仙沼市本吉町）は、海も山

2011 年 6 月 7 日　田植え

も、そして田んぼもあります。恵まれた自然の中で大谷の人たちは暮らしを営んできました。

この自然と暮らしを子供たちに伝えるために、２００４年から、幼稚園と小学校、中学校が連携して「大谷ハチドリ計画」に取り組んでいます。その活動の一環として「ふゆみずたんぼ」で稲を育てながら、多様な生き物が生息する持続可能な環境について学んでいます。

3.11 の大津波はこの田んぼをも飲み込み、壊滅状態になってしまいました。家屋や車などの膨大なガレキが散乱する田んぼに呆然とするしかなかった。それでも、この田んぼで子供たちがこれまでのように元気に動き回れば、地域の復興にも大きな励みになるはずです。

東京にいる仲間たちの後押しもあり、「ふゆみずたんぼの復興プロジェクト」を立ち上げて支援を呼びかけたところ、全国から多くのボランティアが駆けつけてくれました。作業はすべて手作業で行

うしかありませんでしたが、多くの人たちの力で田んぼは甦り、震災から 3 か月後には、いつもの年と同じように泥にまみれた子供たちの歓声が響いたのです。

ボランティアの中に映像カメラマンがおり、この「ふゆみずたんぼ復興プロジェクト」を映像として記録してくれました。この映像は「甦れ！ふゆみずたんぼ」というタイトルで YouTube にアップロードしています。被災しガレキだらけの田んぼが甦っていく様子や、苗を植えて、雑草と格闘し、例年以上に実った稲を刈る子供たちの生き生きとした姿。言葉だけでは伝えることのできない姿が映像となって映し出されています。ぜひご覧ください。

甦れ！ふゆみずたんぼ　（気仙沼のたんぼ復興プロジェクト）
https://www.youtube.com/watch?v=ruDKk7LR7wg

2011 年 10 月 7 日　稲刈り

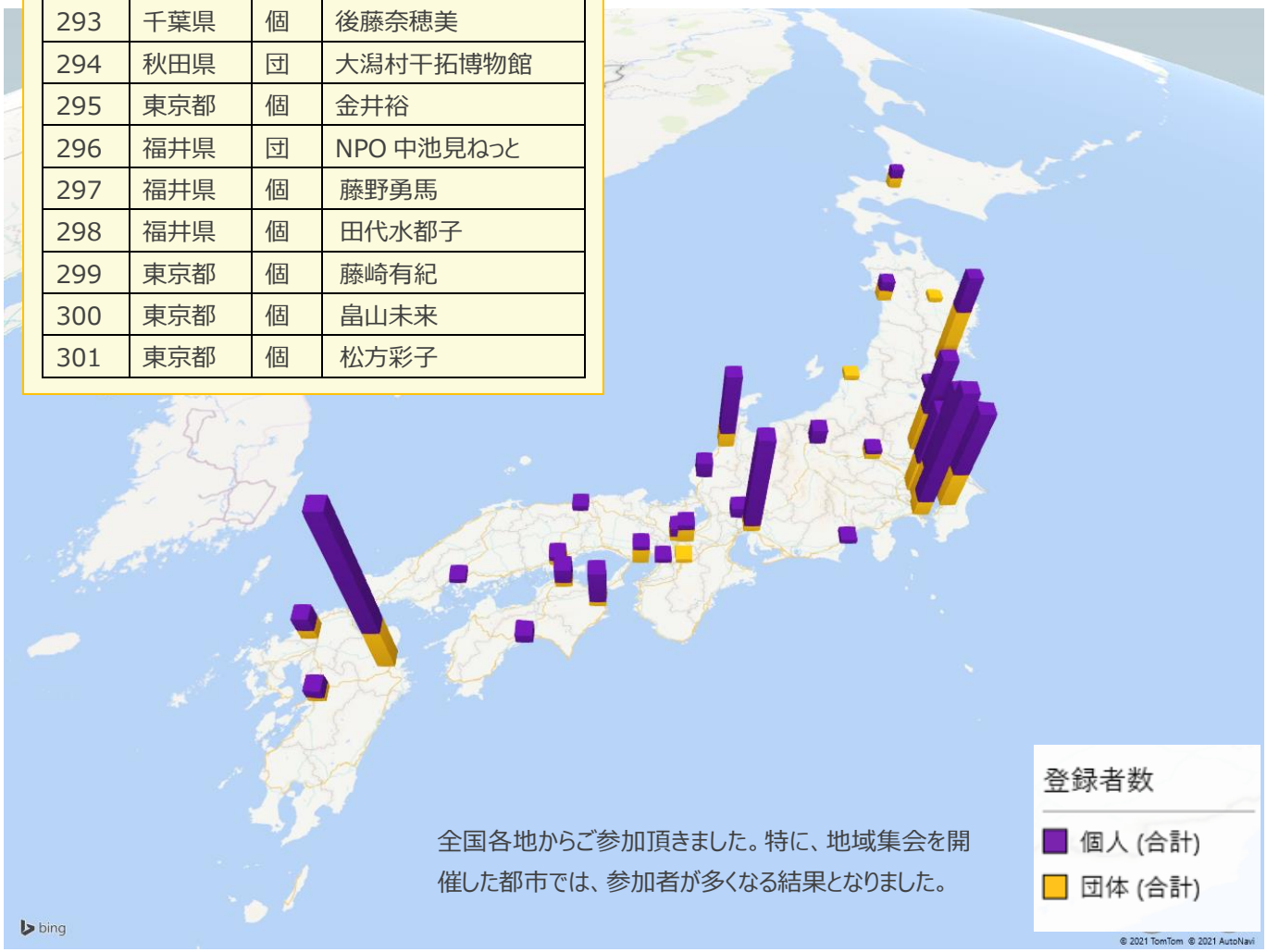
田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト！参加者数が 300 を超えました　　ラムネット J 事務局

■田んぼ 10 年プロジェクト　新規登録者

2020 年 11 月～2021 年 3 月

289	熊本県	個	1 名
290	宮城県	団	登米市伊豆沼・内沼サンクチュアリセンター
291	宮城県	個	平塚明
292	東京都	個	大和田順子
293	千葉県	個	後藤奈穂美
294	秋田県	団	大潟村干拓博物館
295	東京都	個	金井裕
296	福井県	団	NPO 中池見ねっと
297	福井県	個	藤野勇馬
298	福井県	個	田代水都子
299	東京都	個	藤崎有紀
300	東京都	個	畠山未来
301	東京都	個	松方彩子

皆様のお蔭をもちまして、田んぼの 10 年プロジェクトの最終年 2020 年度内に、目標であった参加者数 300 件を到達することが出来ました。
新型コロナ拡大の影響により、後継プロジェクトの立ち上げのキックオフ集会が遅れております。暫定的に 2021 年度の途中までは、「田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト」（略称：田んぼ 10）のまま継続していきます。



全国各地からご参加頂きました。特に、地域集会を開催した都市では、参加者が多くなる結果となりました。

水田部会からのお知らせ

「田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクト報告書ー10 年の振り返りと新しい協働を目指して」を発行しました。（田んぼだより 21 号とともに皆さんにお届けしています）。参加する皆さんの活動のすべてをご紹介することが出来なかったことをお詫びいたします。

CBDCOP10 以前の活動からここまで、共に活動くださった皆様に心より御礼申し上げます。

次年度からの活動についてはまだ十分な議論ができていませんが、ワークショップやイベントなどで出された意見をもとに、次のステップに移行する準備をしています。引き続きまして皆様のご参加をどうぞよろしくお願いいたします。

「田んぼの生きものを育むお米たち」の掲載情報を募集しています。

ウチの田んぼには、こんな生きものが居て、こんなことを気にして栽培しています。といった情報とお米の入手情報を事務局までお送りください。随時、田んぼの生物多様性向上 10 年プロジェクトのお米の紹介サイトに掲載します。 詳しくは、こちらのサイトをご参照ください。 https://tambo10.org/

情報をお寄せください

田んぼ 10 年事務局では、皆様からの情報をお待ちしています。

是非、皆様の活動の様子を、メーリングリストや田んぼだよりでご紹介ください。 寄稿歓迎

また、「このような内容の記事を掲載して欲しい」などというご希望もお寄せ下さい。

編集後記

バーチャル会合、バーチャル観察会など、外出/人々との触れ合いが制限される日々が続きます。

先ごろ開催されたバーチャルミーティング「持続可能な農業と食料システム」では

・小規模農業・家族農業こそが生物多様性の保全に貢献する持続可能な農業であり、ここに対してお金が支払われるべき

・土の多様性が大切、集約農業を減らそう

・地産地消の推進ー人間の健康と結び付けたポジティブな方法（レシピの紹介など）で地産地消を主流化することは、時間はかかるが、地域の経済にも貢献する（英語での会合だったので正確な表現ではありません）。

などが熱く語られました。人にも生きものにも環境にも配慮する小規模農業こそがこれからの主役なのだと思いました。

安藤よしの

全農　MS&AD　MS&ADインシュアランス グループ　co-op コープデリ　コープデリ連合会　食卓を笑顔に、地域を豊かに。

連絡先/事務局
ラムサール・ネットワーク日本
info@ramnet-j.org
FAX:03-3834-6566

にじゅうまるプロジェクト

田んぼ 10 年プロジェクトは、企業からの支援をいただいています。
田んぼ 10 年プロジェクトは、にじゅうまるプロジェクトに参加し、
国連生物多様性の 10 年日本委員会の連携推進事業に認定されています。

このニュースレターは、2020 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて作成しました。